

エドワードⅡシルフィア国第一王子。錬金術を研究するのが好きなインドアオタク。金髪で長髪の美形だが背の低さがコンプレックス。19歳。隣国の王子アルフォンスに最近求婚された。

アルフォンスⅡセイマ国第一王子。なにかとやり手だと評判。頭脳、容姿、声の三拍子そろった完璧主義者。エドワードより頭ひとつ分背が高い。短い金髪の18歳。隣国の王子エドワードに求婚中だが、行動には謎が多く……。

ウインリイⅡシルフィア国第一王女。エドワードの姉。弟よりも政治に関しては優秀で、父ホーエンハイムのお気に入り。20歳。

ホーエンハイムⅡシルフィア国現国王。エドワードとウインリイの父。

イズミⅡシルフィア国故王妃。エドワードの母。女豹のようなプロポーションの黒髪美女だったが、若くして死んだらしい。

トリシャⅡセイマ国王妃。アルフォンスの母。おっとりした性格。

ハイデリヒⅡセイマ国現国王。のんびりした性格。似たもの夫婦。

「刹那に咲くは、金の声」

叶
逢樹

シルフィア国第一王子であるエドワードは、広い城の中を、まっすぐに続く白い柱の波に囲まれながら歩き続けた。早足で。

やや遅れながらも、その背を追いかける長身の男が、何度呼びかけても答えずに。

「――兄さん！ 待ってよ！」
声をかけたほうの、短い金髪を風になびかせる青年の

名は、アルフォンスという。エドワードより一歳年下の十八歳で、隣国の王子だった。

最近は何日のようにエドワードの城へやってきては、女性泣かせの甘い声で会話を持とうとする彼に、エドワードはたいてい同じように返事した。

「おまえが呼ぶな！ それを！」

エドワードが毎回こう返すようになったのは、およそ二月ほど前から。

理由も知らされず、突然名指しで招待されて、王子の務めを果たすために、アルフォンスの国、セイマへと出かけたのがそのときだった。

当時そこで熱狂的な歓迎を受けたエドワードは、この国は随分と活気があるんだなあと思気な感想を洩らしていたのだが、喜びを隠せない様子のアルフォンスの父、ハイデリヒ国王から当たり前のようには、

「それで、我が息子との結婚式は、どちらの国で先に行つたらよいのでしょうか」

と尋ねられ、あやうく日光の当たった吸血鬼のように、灰になりかけた。

「……なんですか、その冗談は」

呆然と聞き返すエドワードに、アルフォンスの母君ト

リシャ王妃は無邪気にこう答えた。

「エドワード王子、あなたは我々の息子に、ご自分のことを兄と呼ばせているではありませんか」

「……それがなにか」

「セイマでは、姉妹、兄弟と呼び合つて許されるのは、血のつながらない者同士の場合、恋人の間柄だけですのよ」

暴露されたその足で、エドワードは当然アルフォンスに詰め寄つた。すると、

「もちろん僕はそのつもりであなたを兄さんと呼んでいたよ。……子供の頃から、ずっとね」

などと答えるではないか。

いったいどうしてくれようと腹を立て、とりあえずその場では腹部に拳一発をあてて、アルフォンスがひるんだ隙に逃げてしまったのだが、帰国して以来、隣国の王子は毎日のように自分のテリトリーへとやってくるようになってしまった。

だが、冒頭のように、いくらやさしく微笑みかけられようが、(初心な少女であれば)見つめられると思わず赤面してしまうような美形の男であろうが、長らく弟のカテゴリーにいたはずの男を、いまさらどう考え直せとい

うのか。

「それじゃあ、十年も、おまえは俺をだましていたのか。昔……本当の兄弟のようになろうとおまえは俺に言ったよな。それだから……ずっと、本物の弟みたいだと思っていたのに……、本当に、本当の兄弟のように……そう信じていた十年分の俺を、おまえはだましたことになるんだぞ！」

アルフォンスが直面した、口を引き結んでこちらを見返す瞳にはさまざまな感情が浮かんでいた。長く淡い金色の髪をゆったりと結び、後ろにたらしめたエドワードは、美しい絹で織られた薄青地の上下に、赤いマントを羽織っていた。

「僕はだましていたなんて、この十年、一度だって思ったことはない。ずっとずっとあなたにいつかこの気持ちが届くことを信じて、そう呼んでいただけ。……僕にとってあなたはたったひとり、兄弟と呼びたいひとで。……そして、僕が一番ほしかったひとだ。……十年前からね」

じつと瞳を見つめられ、自然ととられていた指先に、あろうことかアルフォンスは一瞬の隙をついて唇を押し付けてきた。

ぎゃあと叫んだエドワードは、稲妻が走ったような衝撃に思わずその手を振り解き、唇の触れてきた指先を後ろに隠した。

「僕と……結婚してください、兄さん」

まっすぐに見つめ返す、穏やかな金の双眸。

「じよ……！ 冗談も……！ たいがいにしてくれ！」

唐突な求婚に、両肩を激しく震わせながらようやく叫ぶと、エドワードはその場を走り去った。

二人がはじめて出会ったのは、エドワードが九歳の誕生日を迎えてまもなくの頃だった。

幼い二人はすぐに意気投合し、別れ際には離れたくないと言って一緒に泣き出す程仲むつまじかった。

そんなある日のこと——なんて気の合う二人だろう、まるで兄弟のようだと。

ほとんど背丈の差がなかった自分たちに、誰かが微笑んでそんなことを言っていた。

それを聞いたセイマ国の王子は、じつとエドワードの瞳を見つめ、それじゃ、今日からあなたのことを、兄さ

んと呼んでもいいかな? と。

にっこり笑ったアルフォンスが実にやわらかく、優雅に許可を求めてきた。

ひとつ違いの姉はいたものの、自分でもいつもアルフォンスに会うたびに、こんな弟がいたら毎日が本当に楽しいだろうと思っていたので、エドワードは当然それを了承した。

当時のアルフォンスは、たった八歳の子供だったはずなのだ。

それなのに、あの頃からずっと想いは変わらないなどと言われて、自分は平静を保っていられるわけがなかった。

人種に分かれていない隣国だけあって、髪の色も瞳の色も、お互いよく似ていた。

今現在も、身長こそ違えど不思議に似通った容姿は変わらず。

アルフォンスの兄と呼ばれて感じた、くすぐられるような優越感と独占欲の類を、エドワードは十年間、ひたすら尊い友情の証として信じ続けたというのに。

今日のアルフォンスは落ち着いた深緑色のマントを羽織り、セイマ国の紋様で縫い取りの入った象牙色のチュ

ニック姿だった。短い髪も瞳も輝く金色で、いくら見ても返しても飽きないと思わせる色合いだった。

子供の頃はそんなふうが好きだけ相手の様子を眺めることも出来たのだが、今はもう、エドワードは目を合わせられない。

それどころか現在の自分は、一度でもあの瞳を見てしまったらおしまいだとさえ思っている。

だまされた悔しさと、唐突につきつけられた婚姻のこと。本物の弟のように可愛がっていたアルフォンスがまるで見知らぬ男に変貌してしまい、いつたいどうしたらいいのかわからない。

いつそ自分が女であればすべてまるく納まったのか。

そんな仮定をやけになって想像してみたが、あまりに不毛ですぐにやめた。

もちろん、あの日城へ戻ってすぐに、父であるシルフィア王国国王ホーエンハイムに、混乱しきった自分の気持ちを訴えてはみたのだが、恐ろしいことに、父は最初からすべて知っていたとのたまった。

「セイマの王子はもう随分と前に、俺におまえとの婚姻について了承を求めてきているぞ」

「……う、嘘だろ……」

「もちろん俺は、こんな息子でよければいつでもさしあげてでもいいと返事しておいた。わが国には王女ウインリイもいることだしな。なにもこの国は男が継がねばならないという決まりはない。あれのほうは国を傾かせない才能はあると思っている。おまえときたら来る日も来る日も錬金術とかいうわけのわからないものに夢中になって、ちっとも帝王学を学ばなかったからな。城にこもってばかりいるからこれほどの大事にも今まで気づけずいた。すべておまえの自業自得というものだ」

「そ、そんな——！　それが実の息子に対する態度かよ！　あんたは鬼か！　悪魔か！　ホムンクルスカ！！」

思わず人差し指で国王を指しながら非難してみたが、木の葉ほどもひるんだ様子はなかった。
「何を言う、これほどの縁談は実際ないから了承したんだぞ。考えてみる。相手はあのセイマ国のあととり息子。幼い頃から随分と頭がきれて、諸外国との交易も率先してあの若者が行っているという。アルフォンス王子が次期国王になることは周知の事実。わが国以上の武力保持に、自国での食物自給率も高い。統制の整った国と婚姻により同盟を強めるのは昔からあたりまえのことだ。お

まえの身ひとつであの王子が我が国を裏切らない保障になるというのなら、俺が反対するわけがなからう。安心して、興入れすることだ」

にっこりと笑顔でホーエンハイムはそこまで告げると、どこにしまつてあったのか、亡き妻イズミ王妃の形見であつた、若かりし頃彼女が身につけた純白のウエディングドレスまで出してきた。

できるか、ばかやろうと叫んで、パニックに泣きながらエドワードはその場から逃げ去つた。

確かに、自分は学者馬鹿なのかもしれない。

幼い頃から、錬金術に関する専門知識を得るために本を読み漁り、可能性のあるかぎり思考を繰り返すことだけに生きがいを感じていた。そんな自分にとって、この国の王子であるということは実際どうでもいいことだったし、それどころか邪魔にさえ思っていた。

いずれ王となる自分には、可能性のある未来などない。近隣に対して示がつくような政治をし、国民に支持されるためにたくさんの議に決するだけの日々。そこに

は探究心も、新たな発見も、未知の記号も見当たらなかった。

成長するにしたがって、自分の両肩にのしかかる責任が嫌でたまらなかった。

いつかは受け取らねばならない重い印を、今だけは忘れようと、近頃はますます日々研究に没頭していた。

どうせなにをやるうが、この身分から逃れることはできない。いつかは何もかもをあきらめて、王座へ立たねばならないのなら、今くらいはやりたいようにしてしまえと。

そんなふうには逃げることで、どこかしら自分を甘やかしていたのかもしれない。

ところが、父でもある国王ホーエンハイムは、なにもおまえが王位を継ぐ必要はないと言いつつ放った。

そのかわり、結束を強めるために、ぜひ隣国へ行って、セイマ国王の手をとれと条件を出したのだ。

自分には当分縁遠いことだと思っていたが、もしかしてこれがいわゆる『政略結婚』というものだとしたら――なんとという恐るべき事態だろう。

世の王女たちは、こんな悲惨な思いで、道具として他国へ嫁がされてしまうのか。

いや、しかし、考慮すべき点として、多少は今の自分のほうがそんな彼女らに比べて有利だろう。

なぜなら、自分は見知らぬ男に求婚されているのではなく、相手はあのアルフォンスだった。

エドワードはふと、自分の手に口付けてきたアルフォンスの表情を思い出した。こちらを見返す艶やかな金の瞳とやわらかな物腰。

はつと我に返り、あわててエドワードは自分の指先を擦りはじめた。

おかしい。あれから何十日も経っているというのに。「くそっ……」

しかし赤く色を変えるまで肌を擦り続けても、アルフォンスの唇の感触は生々しくそこに残ったまま消えなかった。

さらに一月が過ぎても、こりずにアルフォンスはやってきた。

定刻どおりにセイマの馬車が到着するのを研究室の窓から眺め、エドワードはうつろな気分になった。

とりあえず、ここにいる限りは安全だ。

なぜかアルフォンスは、エドワードの研究室には、一度も訪れてはこなかった。

もしエドワードが一日中ここにもつていたとしても、そしてその間まったくアルフォンスへの挨拶すらなくとも、いつもどおり定刻まで城で過ごして、にこやかな挨拶を周囲に振りまきながらセイマ国王子は自国へと戻っていく。

だから、嫌ならここから出なければいいのだ。

そんなことを考えていると、城へ入る直前のアルフォンスが、唐突に上を見上げてきた。

窓際に立つエドワードと、視線がぴたりと合わさる。

長身の男はとたんに笑顔で優しく笑いかけた。

ぎくりと身をこわばらせ、それからエドワードはさつとカーテンを閉じた。

「なんなんだよ……っ、俺はっ……」

心音を早めながら、エドワードはつい弱気になる自分をなじった。

何故隠れる必要がある？ 自分に非があるわけでもないのに。

そうだ、こんなにこそこそする必要はないはず、しか

もここは、自分のほうがよく知る領域だ。

「いつもどおり生活してりやあいいいじゃねえか。何やってんだ、俺は……」

いつもどおり、いつもどおりだと何度も呟いて、エドワードは机に戻った。

ひらきつばなしの本に手を伸ばし、重要な箇所を別の紙に書きとめていく。

まだまだ錬金術の研究は途中でしかない。知らなければならぬことはいくらでも存在する。

たくさんの他の研究者たちが書き綴った本は、エドワードがこうしている間にもどんどんと増えていくのだ。

そんなふうを考えていたエドワードは、ふと、我にかえると、乾いた笑いをこぼした。

「ホント……なにやってんだよ、俺。……はは」

いつもいつも、エドワードは時間に追われていた。

ぎりぎりの期限まで、自分が自由でいられるその一瞬が終わるまでに、とことん学術にのめりこんでおこうと誓った日々。

けれど、ないと思っていた時間は、もしかしたらこの先も変わらず得られることになるのかもしれない。

——そう、あの年下の男の手を、素直にとれば。

そのときに『興入れしても自分の研究だけは続けさせてほしい』と頼めば、きっとアルフォンスは断らないだろう。

いっそ彼を利用して、どこまでもずうずうしく生きていけばいいのだ。

表面上はおとなしく従順なふりをして、周囲を欺き、その後一自分の安泰を手に入れてみたらどうだ。

向こうにしたって、この十年自分をまんまと騙してきたのだから、こちら側だってそれをやってはいけないとは思えない。

同じようにたとえば十年、アルフォンスの庇護下で静かに暮らしてみせ、ほどぼりが冷めた頃に逃げだせば、たとえ今は熱に浮かされたようにどこか思考の狂ったあの男も、きつと平常心をとりもどすのではないだろうか。アルフォンスの執着心さえ消えてしまえば、自分を改めて追う者はもはやいないはず。

そのときこそ、晴れて自由を手に入れることができる。「決めたッ」

そうと決まれば早いほうがいい。

意気揚々と決意を新たにし、企みを胸に潜ませたエドワードは研究室をあとにした。

「……本当に？」

はじめ、アルフォンスは信じられないといった表情で、エドワードの顔をじつと見ていた。

「ああ、おまえの国へ行ってやってもいい。そのかわり、さっき言った条件は飲んでもらう……」

「研究室くらい、いくらでも作ってあげるけれど、」

そう呟いて、まだ衝撃覚めやらぬ様子の男は、金色に透き通る睫を何度か揺らした。

「いったいどんな心境の変化があったのかな、兄さんには」

疑われてしまうのも仕方がない。

昨日までは鬼を見るような目つきで避けていたはずのアルフォンスに、唐突に「結婚してやってもいい」と言い始めたのだから、鵜呑みにできなくても仕方がない。

「まあ、でも——」

しかし、ようやくアルフォンスは自分の中で結論をつけたらしく、声を明るくものと変化させた。

「なにはともあれ、兄さんがそう言ってくれるのを待つ

てたよ！——嬉しいよ、すごく！」

と、唐突に叫ぶと、アルフォンスはエドワードの両肩を捕まえ、それからぎゅっと抱き寄せた。

「うわあ！」

すっかり油断しきっていたエドワードは、思わずおかしな声を出し、両手でアルフォンスをつっぱねた。

「あ、や、やっぱり、こ、婚約！ 婚約からにしようぜ！いきなり結婚は、は、早すぎるよなー、やっぱり！」

どんと両手で押されて後ろへ下がりがけたアルフォンスは、行き場を失った両手を空中に浮かせていたが、じつとエドワードの赤面状態だった様子を観察し、一度ため息まじりに苦笑した。

「……うん、僕、急いではないよ。……こんなに長い間待っていられたんだから。とりあえず兄さんが僕と結婚してもいいって気持ちになつてくれたことだけでも嬉しい。……とつても嬉しいよ！」

慈しむような笑顔でじつと見つめられ、エドワードは居心地が悪かった。

こんなふうには真摯な瞳で見つめてくる相手を騙してしまつて本当に良かったのだろうか。

後悔がじわりと胸へ湧き上がったが、あえて無視をす

る。

お互い様なのだこれは。だから自分だけに非があるなんて考えるな。

そんなふうには思い始めたなら、この計画は水の泡になつてしまうのだから。

「それじゃあ、とりあえず僕の婚約者として……改めて僕の国へ一緒にきてくれないかな。父上と母上にも正式にこのことを教えなきゃね」

無邪気な笑顔で微笑むその様子に、心のどこかが痛みかけたが、エドワードはそれを忘れてしまうことにした。

善は急げとばかりに、アルフォンスはシルフィア国王ホーエンハイムに、エドワードと正式に婚約したいとの旨を伝えた。

当然ホーエンハイムがこれを不承諾するわけもなく、二人の婚約はあっさりと決まった。

その日の夜には城の中で内々に婚約披露が行われ、三日後にセイマへ、エドワードはアルフォンスの婚約者と

して訪れることとなっていた。

まるでこの婚約披露パーティの主役が自分のことではないように、宴会の料理をひたすらばくついているエドワードを横目で眺めつつ、少し離れた場所に立っていたアルフォンスに近づいたのは、シルフィア国王女のウインリイだった。

「おめでとう、アル。とうとうエドをモノにしたのねえ」
「なにかやや語弊のある言葉だけれど、とりあえずお祝いの言葉として受け取っておくよ、ウインリイ」

青年はにっこりと笑ってみせた。

長い金髪をくるくるときれいに結び上げ、胸元を大きく強調させたシフォンドレス姿の彼女は、彼にとつて二歳年上の幼馴染だった。

「あら。てことは、まだあんたたち、やってないの？」

「やってつて……」

眉を中央へ寄せながら、ダメだよ女の子がそんなことを言っちゃ、と、アルフォンスは幼馴染をたしなめた。

「兄さんはあのとおり、ガードが固くてね。……とうとか、幼いし無邪気すぎて、僕は日々自分自身の自戒を新たにしているよ」

「それは良い心がけだこと。あんたが見たとおり、自慢

じゃないけどエドはこれまでまったくその手の話題に関わったことはないから、今の自分の立場に気づくにはまだまだかかると思うわよ」

通りかかった給仕からシャンパングラスをふたつ受け取り、そのひとつをアルフォンスに手渡しして、王女はシニカルに口角を上げた。

「いいんだよ、これで」

すまし顔でセイマ国王王子は受け取ったシャンパンの気泡に薄く唇をつけた。

「絡めとられて身動きできなくなるまで、兄さんは何も気づかなくていいんだ。でも……気づいたときには、もう遅いけれどね」

ホント、悪党よねえアンタつて、と、シャンパンを一息に飲み干したウインリイが呟くようにして睨みつけると、それを受け止めた青年は実に愉快に笑ってみせた。

「僕は何もかも手に入れないと気がすまない人間だからね。大丈夫、まあ、見ててよ」

最後には、ちゃんとあのひとを納得させてみせるから。自信たっぷりな微笑まれ、ウインリイは心の中で心底エドワードつてかわいそうと思ってしまうた。

あのアルフォンスに目をつけられてしまったのが、運

のつきよねえ、と。

「……兄さん、起きてよと、耳のすぐそばで囁き声がした。」

ぼうっと視線を合わせて数秒後、エドワードは馬車の中で思い切り叫び声をあげた。

「おま、おまえっ、近すぎ！」

いつのまにか眠り込んでしまう前までは、たしかにアルフォンスは向かい合わせで馬車の中に座っていたはずなのに。

目覚めてみれば青年は隣へ移動していて、しかも自分の肩を自然に抱いていた。

「だって、兄さんたら居眠りしたままひっくりかえりそうになっていたんだよ。僕たちは婚約したんだから、肩くらい捕まえていてあげて当然でしょ。馬車はどうしたって揺れるものだから、万が一兄さんが頭を打ってこぶでもつくったら大変だし」

「……まあ、そう言われてみれば……そう、だけどさ……」

さりげなく婚約という言葉を使われると、それはたしかに当然だという気がしてしまい、エドワードは了承せずにはいられなくなっていた。けれどエドワードがすっかり目覚めたあとも、アルフォンスの手は相変わらず肩を抱いたままだ。

「いや、でも、せ……狭いよな、ここ！俺と一緒にやゆったりできないだろ？ 逆向きのほうが景色よさそうだよな！」

大慌てでそこまで続け、エドワードはぱっと反対側の席へと移った。

疾風のように移動してしまったエドワードを目だけで追いかけて、それでもアルフォンスは不満な顔ひとつ見せなかった。

「そろそろ着くからね、セイマの国境は随分前に越えていたし。……ほら、もう街中はとつくに過ぎちゃってるんだよ」

外の様子を指し示されて、エドワードも目を向けた。

たしかにもう、見える景色はなだらかな緑の丘を登り、城までは目前となっている。

「俺、ずっと寝ちまつてたから……」

「うん。……昨日は眠れなかったの？ ……これからのことが不安になった？」

向かい合わせの席で、随分と近くから見つめられ、エドワードは居心地が悪かった。

「い、いや……。そ、そんなこと、ねえけど……。な、なんつーか、興奮しちまつたというか……」

「遠足前夜の子供みたいに？」

思いつくままに述べてみると、いきなりエドワードは態度を硬変させてがなりたてた。

「なんだと？ 俺がチビだって言いたいのか？」

「誰もそんなこと言っていないよ」

売ってもいない喧嘩を買われそうになり、思わずアルフォンスは苦笑した。

「ほんと、兄さんで……いつまでも変わらなくて……可愛いよね……」

つい、言っただけはいけない一言が飛び出した。

当然ながら、それを聞いたとたん、エドワードは利き腕でアルフォンスの頭部を殴ってきた。

「おまえは常に一言余計だ！ 俺の身長の話は、金輪際するな！」

真つ赤な顔で吠え続ける婚約者に攻め立てられ、セイマの王子はごめんなさいを連呼するしかなかった。

いまさら、身長のことじゃなかったんだけどなあとは、言えない雰囲気だった。

エドワードとアルフォンスは、待ち構えていたセイマ国の王と王妃のもとへと通された。

三日前に詳細を聞いた王たちは、当然ながら満面の笑みで二人を迎え入れた。

「ああ、エドワード。まさかあなたが本当に私たちの息子になってくれるなんて。……よくやったわ、アルフォンス」

見れば、王妃のトリシャにいたっては、目に涙まで浮かべている。

アルフォンスの手をとって喜びを伝える王妃の様子に、なぜかエドワードは赤くなってしまった。

「あ、いや……。その、俺……」

返答の言葉が浮かばずにぼそぼそと呟くと、横でアル

フォンスが、

「母上。随分とご心痛をおかけしましたが、ご安心ください。僕は必ずこの人と一緒にこの国を創りあげていきますから」

と、にこやかに答えていた。

「アルフォンス、そしてエドワード。きみたち二人がこうして共にこの国の次代を担ってくれることになって、私たちはとても感謝しているよ」

ハイデリヒ国王はこれまた瞳を潤ませながら、二人の若者をおかざるがわる眺めるといった始末だ。

やっばりこの国の人間はどこかおかしい……と、心中で疑問符だらけになるエドワードをよそに、さっそく三人はこれからどうやってセイマの国民にエドワードの披露をしようかという話題でもちきりになっていた。

しばらくその輪に付き合って落ち着かないままの時間を過ごしたあと、やっつと開放されたエドワードは城の中を移動した。

通されたのは南東の塔の一階にある、庭に面した綺麗な部屋だった。

「ここがこれからは兄さんの部屋になる。僕の部屋はほんら、少し離れているけれど二階の真上だから、いつでも

遊びに来てくれたら嬉しいよ。それから、兄さんの研究室の話だけれど、それは西の塔に用意させた。あちらのほうが目当たり具合からみて、文献的な書物の傷みが少ないと思うから。とりあえず僕の国にあつた錬金術関連の書物はすべてもう運び込んであるから、あとは兄さんが自分の国のものを移動させるといいよ」

部屋の中央に立ち、これからのことを手際よく話すアルフォンスの様子に、エドワードはほっとしたような顔をした。

「……どうしたの？」

機敏に察知した青年が首をかしげるようにして聞いてくるので、エドワードは思ったままを言った。

「……ん。……なんか、俺が思った以上にオオゴトになつちまつてるんだなあって、ちよつとびびってたんだよ。……けど、おまえはやっばりアルのまんまだから。……なんか……安心した、つっつか……」

つい、甘えるような口調で話してしまい、エドワードははっとした。

そんなことを言ってしまうと、まるで自分は婚約を喜んでいないように受け取られやしないか。

ところが、アルフォンスはじつとこちらを見て、それ

から深く微笑んだ。

「前に言ったとおり、僕は変わってないんだよ。……十年前から、まったくね」

言われた言葉の意味に、エドワードは眉根を寄せた。

「……それ、おかしいだろ。……俺よりでっかく育って
おいて、どこが変わってねえんだよ」

むっと膨れかけたエドワードの顔を見ても、アルフォ
ンスは笑みを変化させない。

「心だよ。……これだけはまったく変わらないまま、……

……今も昔も、ずっと兄さんが好きだったんだよ」

さりげなく告白されて、機嫌を下降させたエドワ
ードは苦い表情になり、それからじわじわと頬を染めた。

「……もう、わかってんだよ、それは……。何度も言う
ことじゃねえだろ」

「どうして？ 思ったことは言わなきゃ伝わらないよ。

……だって、僕が告白するまで、兄さんは僕の気持ちに
ちっとも気づかなかったんだからね」

じっと瞳を覗き込むようにして言葉を続けてくるアル
フォンスに、エドワードは徐々に緊張気味になっていく。

「これからも、兄さんが僕を好きになってくれたって確
信できるまで、僕は何度でも好きだって言い続けるよ。

……これはいくらあなたが嫌がっても、やめられないか
らね」

何を言ってる、と、思わず視線をそらすように下を向
きながら、エドワードは反論した。アルフォンスの瞳を
まっすぐに見つめ返せない。心の奥にある嘘を見破られ
てしまいそうな気がするからだ。

「す、好きに決まってるだろ。好きだから婚約するんだ
から……」

口の中が乾いてしまうほどの緊張感を味わい続けてい
ると、ふと、アルフォンスの指先が顔に触れてきた。

「……ア、ル？」

そつとエドワードの頬を撫でた指に、ゆっくりと顎を
あげさせられる。

「わかってる？ 好きとその唇で僕に誓う意味を……
僕は将来、あなたの夫になる許可をもらったと考えても
いいの？」

随分と角度をつけてアルフォンスを見つめるように首
を固定され、エドワードは目を見開いた。

「意味なんて……好きなのは、言葉まんまのことだろ
……？」

ぎくしゃくと身体をこわばらせながらエドワードがこ

う答えると、なぜかアルフォンスは一瞬悲しげに目を伏せた。

「おかしなことを聞いてごめんね。……僕は何を慌てているんだろうね」

自嘲げみに笑って指先を離したので、エドワードはようやく自由になった。

「……アル……？」

外した自らの指先をもう一方の手で押さえながら、そつとアルフォンスは呟いた。

「……あなたが好きだよ。……この気持ちは本当。……だから、僕の声があなたに完全に届くまで、僕はあなたに語りかけるのをやめない」

いつものようなやさしい笑顔に戻ってそう言う青年の表情に、エドワードは説明できないわだかまりを感じていた。

夜、食事を終えて自室へ戻ったエドワードは寝具へ着替え、ベッドに腰掛けた。

自分の計画が必ずしも順調ではないことを、エドワー

ドは痛感していた。

望んでここへ来たわけではない自分の気持ちは、多分間違はなくアルフォンスに気づかれている。

だから、それでもアルフォンスは前と変わらず、同じようにエドワードを想っていると、意思表示を続けているのだ。

完全にだましてやろうと思っていたのに、のっけから偽装がばれているとはどういうことだ。

自分の何がいけなかったのか、エドワードは先ほどからずつと考えていたのだが、ちゃんとこちらは「好きで婚約する」とまではつきり言ったにも関わらず、アルフォンスはその言葉を鵜呑みにしなかった。

「婚約者として、俺に足りないのは、なんなんだ……」
シユミレーションとしては、『好き』の言葉には同じように『好き』で返せば、人の気持ちに対する跳ね返りは成功するはずだと信じていたのだ。

それが、あんな、いかにも悲しそうに瞳を伏せられ、エドワードはどう対応しているのかまったくわからなくなった。

「ヘンなやつ。……好きって言ってやったのに、なんなんだよ……あれは……」

よくよく考えると、『好き』だなんて言葉を、この年になつて初めてきちんと他人に言つたような気がするのに、せつかく使つた言葉はものの見事に空回りした。

「好きだなんて……言わないほうが良かったのか？ ……」

……。……わかんねえ」

額を何度かこぶしで叩き、思考に行き詰つたエドワードはそのまま後ろの寝台へと背中から倒れこんだ。

部屋の中はろうそくの明かりでほんのりと視界がひらけている状態だった。

格子の入つた硝子窓の向こうで闇が広がり、月明かりのぼんやりとした輝きが筋になつてエドワードの部屋の床へと流れ込んでいた。

横向きでその様子を眺めていると、ふと、かすかに何が耳に入つてきた。

よくよくじつとして意識を向けると、それはハーブを爪弾いているようだった。

……もしかしてと、エドワードはゆっくり身を起こし、窓のそばへと近寄つた。

きしんだ音を立てないようにそつと窓を開くと、上方からゆつたりとしたハーブの音色が聞こえてきた。

やはり、アルフォンスの手によるものだろう。

彼は自分と違い、音楽を奏でるのも子供の頃から大変上手だった。

エドワードの気に入つた曲を知ると、何度でも嫌がらずに繰り返して弾き続けてくれた。

たつた今流れる音色も、昔よく聞いたような、どこか懐かしさを感じさせる、そしてなぜか切ない旋律だった。

窓を開け放したまま、エドワードは再びベッドへと戻り、ふわりと転がって目を閉じた。

ああ、今、何かを思い出せそうだったのに。

一瞬間のどこかに浮かんだ景色を手繰り寄せようと苦勞している間に、自然に導かれた眠りに、エドワードはその先を消されてしまった。

翌日、用意された研究室へと入るなり、思わずエドワードは感嘆の声をあげていた。

「なんだ、この部屋……！」

そこは、壁中に書棚がついた、以前自国であたえられ

ていたものよりもさらに広い部屋で、もちろん既に本棚には大量の書籍が埋まっていた。

それらすべてが、錬金術関連のものだとアルフォンスは言う。

「棚は二重になってるから、奥の列にも入っているよ。でも、隙間もたくさんある。だから、あちらから兄さんの所持しているものをすべて持ってきても、多分余裕で入るはずだよ」

数冊の本を取ってみると、まったく新品状態のものから、ぼろぼろに装丁が破れかけたものまでがその種類別にわかれてきちんと並んでいた。

「よくこれだけ揃えられたな……」

ため息交じりに小さく声を出すと、くすりと隣で青年は笑った。

「実はね、兄さんのことを知りたくて、僕も多少錬金術に関する本を読んでみたんだよ。どのあたりが兄さんの興味をひきつけているのか知りたかったから」

「え……」

そういいながら、アルフォンスも手近な本を手にとつて、中をばらばらとめくつたあと、こちらを見た。

「カドウケウスの杖を探してるの？ 賢者の石を手に入

れるために」

目の前の青年がさりとそう言うので、エドワードはうっかり頷いてしまっそうになった。

「あ……、な……、そ……」

意味不明に口をばくばくと動かししたが、アルフォンスの態度はまったく変わらなかった。

「まあ、その話はまたいつかね。……とにかく、僕もここにこの本はすべて読み終わっているから、けして兄さんの邪魔はしないよ。……それと、この部屋は僕には用がない場所だから……ここに居る間は、僕はあなたを無理やり追い回したりしないから。もし僕に追いかけるのが辛いと感じたら、いつでもここへ逃げていいよ」

そう言つて、アルフォンスは持っていた本をばたんと閉じた。

「……ア、ル……？」

眉を寄せてその表情を確かめようとしたが、間の悪いことに鐘の音が聞こえた。

「ああ、もう会議の時間だ。それじゃ僕は行くね。兄さんは一日、好きにすごしていいよ」

アルフォンスがもっていた本を手渡され、わけもわか

らず受け取ると、青年は挨拶だけでその場から消えていった。

誰もいなくなった部屋で、無機質な本の山に囲まれながら、エドワードは、ほう、とため息をついた。

手にした一冊を持って椅子まで移動すると、乱暴に腰を下ろした。

錬金術の終着点。

確かに、エドワードはそこにあるはずのもの、カドゥケウスの杖がほしかった。

この研究をしていて、今現在エドワードが知っている情報では、カドゥケウスの杖によって、賢者の石は作られるということ。

しかし、言葉どおりにその『カドゥケウスの杖』が杖の形をしているのかさえ、わかっていない状況だった。

「……しかし、なんでアルが……」

ため息をついて、エドワードはアルフォンスが置いていった本のタイトルを読んだ。

『生命の樹木の在処』、か」

カドゥケウスの杖には、二匹のヘビが絡まっているらしい。

その尊い力を蓄えた杖は、世界の中心にあるという、

『生命の樹木』より切り取られ、創りあげられたものとされている。

つまり、エドワードの考えでは、まったく二つの個体で成る、けれど対の存在であるべきものが、この世界本来の生命の力によって融合されたとき、賢者の石は作られるという解釈である。

「命と、命をエネルギーに換える力。この二つの鍵が見つかれば……」

自分の願いは、かなえられるのだ。

ずしりと重い装丁の本を開き、中の文字のひとつひとつを頭へ吸収しながら、エドワードは謎の解明にのめりこんだ。

たしかにアルフォンスの言った言葉は気になったが、問いただしても答えてくれるかどうかわからない。

そんな状態の自分たちがどうも不快になり、それ以上エドワードはアルフォンスについて考えるのをやめた。

その日一日目はたくさんの蔵書のおかげで、エドワード本人が思っていたよりも、あっという間に時間が過ぎ

去った。

そして、翌日も、その次の日も、いつもどおり食事の用意ができたことを女官から聞かされてやつと、エドワードの体内時計は昼、晩の区別ができてくるような状態だった。

アルフォンスはそんなエドワードののめりこんだ様子には気づいていたが、研究所に居る間は自由にしていいと言ってしまった手前、いまさら婚約者の行動を制限できそうもないと苦笑した。

しかし、四日目に入った朝、朝食の席でいきなりアルフォンスは、

「今日は近い人間だけを集めて、内々でパーティを開くので、兄さんも今夜はそのつもりでいてね」

と言ってきた。

唐突な申し出に、どうみてもひるんだ様子のエドワードは、不安を隠せなかった。

「パーティ？ それって、お……踊ったりするの、もしかして」

「当たり前でしょう」

芳しい紅茶の湯気に鼻を動かしていたアルフォンスは、不思議なほど青ざめたエドワードに、実に平然とそう告

げた。

「貴族や皇室の人間が集まって、舞踏にならないはずがないでしょう？ 兄さんだって王子なら、当然舞踏用礼儀作法の一通りは学んできたはず……」

さらりと流そうとしたアルフォンスの言葉に、エドワードは確実に冷や汗をかいていた。

「……あ、いや……、その……つまり、だな……俺……」
しどろもどろに言葉をつなげるエドワードの言いように、アルフォンスはぴんときた。

「もしかして……まさか、シルフィア国第一王子ともあろう人が、ダンスもできないなんて……言ったりする？」
遠く離れた向かい側の席で、とたんにエドワードは口の中だけ、もごもごと呟いた。

「……：……：……：……わ、わかったな……」

子供の頃エドワードは、あまりにもリズム感がないといつも音楽の教師に嘆かれて、自分も随分とそれをコンプレックスに感じていた。

だから楽器のどれも弾きこなせず、当然ダンスは足を踏みまくってことごとくダンス教師を再起不能なまでに落胆させた。

人間、誰だってひとつやふたつ、どうにもならないこ

とがある。

エドワードの場合、それがたまたま音楽関係に集中していただけのことだった。

「僕、付き合うよ」

すっかり顔を伏せて苦い顔をしていたエドワードに、アルフォンスは唐突に笑ってみせた。

「え……」

「兄さんがちゃんと踊れるように、今日は僕が兄さんのダンスの先生になってあげる」

「で、おまえ、今日の予定は……?」

大丈夫、そうにごやかに微笑むアルフォンスの様子に、エドワードは短時間で考えた。

「……人前で恥をさらすより、おまえの前で恥をさらすほうが、まだましか」

あきらめ口調でレッスンを受け入れることにしたエドワードを見て、アルフォンスは嬉しそうに微笑んだ。

食事のあと、空いている一室へ移動して、二人はさっそくダンスの授業を開始した。

「一応聞くけど、兄さん、男の役がいい? それとも女

の役? ……どちらにしても相手は僕になるけれど」

「そりやおまえ、男にきまつてんだろーが」

反り返るように態度だけ大きくして、エドワードは言い切った。

「……言うと思っただよね……。……それじゃ、まず、それで練習してみようか」

添えるように差し出されたアルフォンスの手をぐいと受け取って、エドワードはとりあえずポーズをとった。

ただ手と手が触れているだけなのに、とたんにアルフォンスは、随分嬉しげに表情をほころばせた。

「はい、それじゃいくよ。いちに、さん、いちに、さん……」

同時に足を動かし始めたが、アルフォンスの優雅な足捌きにまったくついていられないことが、ものの数十秒で発覚した。

「うわ、ご、ごめ……!」

おまけに、もたついていたかかとで、アルフォンスの磨き上げられた靴を連続して踏む始末。

「……い、いいけど。……でもね、兄さん……これつてやっぱり」

痛みに顔をしかめつつ、やんわりとアルフォンスは兄

に促した。

「逆の立場で練習したほうが、多分もっと楽に覚えられ
ると思うんだけど……どうかな」

先ほどもではそんなことを言われたらできる限り反発
してやろうと思っていたが。

だがしかし、三度も踏み切ってアルフォンスの足の感
触をまざまざと覚えてしまつては、さすがのエドワード
も小さく頷くしかない。

「わりい。……わかつた……ごめん」

一度離していた手を、今度はアルフォンスがゆつたり
と握り締めてきた。片手と腰をふんわりと支えられて、
エドワードはそのまま、すべるように身を進ませた。

「いちに、さん、いちに、さん、いちに、さん……うん、
大丈夫だから、そんなに緊張しないで」

男性役になったアルフォンスのエスコートこそ、完璧
だった。

自己主張するような、エドワードの強引なリードとは、
まるで違う。

ほとんど触れていないと思わせるほどで、相手からの
力は、エドワードのどこにもかかつていなかった。

逆にエドワードのほうが、それだけ緊張しきつて、ア

ルフォンスの動きをつい、自分から引き寄せようと指に
力を込めていた。

「そんなにしがみついたら……踊りにくくない？」

いつしか頭上から苦笑ぎみに声が聞こえてきたが、ス
テップを覚えきるのに集中していたエドワードはまった
く気にした様子もない。

「話し……かけるな。気が散る……！」

ダンスは足元を見てはいけない。首をうつむかせるこ
となく、相手の足の動きに沿わせて、音楽と共に身体を
流す。

しかし、実際のエドワードは、アルフォンスの胸に額
をくつつけるようにして足にばかり意識を集中させつつ、
両手はがっちりと相手の指先を握り締めてしまっていた。
「ダンスというより、拘束されているみたい」

思わず洩れた笑い声に、ようやくエドワードは顔をあ
げた。

「もうちよつと、力、抜けないかな」

「んな、こと……言ってもなあ！」

抜きたくつても抜けねえんだよ、とふて腐れてエドワ
ードが睨みつけると、おや、と嬉しそうにアルフォンス
は笑ってみせた。

「それじゃあ、僕が力、抜かせてあげようか？」

「どうやってだよ？ 俺本人がムリだっていつてんのに……」

「あとで怒らない？」

じつと見つめてくる金色の瞳は、何事かを伺っているように見えた。

「やれるもんならやってみるよ」

できると言い切れるアルフォンスの自信を、エドワードは僅かほども信用していないことが明らかだ。

「じゃあ……」

両手をぎゅっとエドワードに握らせたまま、アルフォンスはゆっくりと顔を寄せ、額をこつんとエドワードのそれに押し当てた。

「目を閉じて」

唐突に近づいた金色の瞳に命じられ、わけもわからずエドワードは瞳を閉じる。

すると、ふわりとやわらかなものが、まぶたの上にし当てられた。

「……っ？ ア……ル？」

温かく、その感触が触れるたびに、鼻をくすぐるほど良い、樹木に似た匂いがほのかに香った。

押し当てる場所は、額、頬、顎と、ゆっくりと移動していく。

「な……なに、して……？ わあ！」

唐突に、耳朶が熱くなった。

驚いて目を開けると、アルフォンスが丁度、当てていた白い歯を、その場所から離れたところだった。

「なっ……おまえ、なに、し……っ？」

「力が抜けるおまじない」

「俺の耳を齧ることがか！？ んなこと……嘘だろ！！」

噛まれたほうの耳へ目一杯集中させたエドワードの視線の具合に、アルフォンスは微笑うばかりだった。

「このくらいで許してあげようと思っていたんだけどなあ……」

仕方ない、と呟いた唇が唐突に近づき、エドワードの唇の上で、一瞬音をさせて離れていった。

ぎよっとして限界まで開かれた目が、ただ、アルフォンスを見つめ返していた。

その様子を、アルフォンスはじつと観察するようにしていたが、それはどこか意地の悪い表情だった。

「ばっ、ばかや、ろ……っ？」

もう一度近づいた唇に驚き、必死で背を逸らしたが、それでもエドワードの身体に覆いかぶさるようにして、アルフォンスは唇を押し付けてきた。

思わず両目をぎゅっと閉じ、息を呑むと、唇は唐突にエドワード側へと割られていった。触れてくるものが熱い塊へと変わり、はっとして再び目を開けたが、そこにあったアルフォンスの瞳が、やはり閉じられずに開いたまま自分を見ていたので、怖くなり、またエドワードはきつく閉じなおした。

(何を考えてる……っ)

思い切りわめいてやりたかったのに、実際、まったく声が自由にならなかった。

「んーっ」

相手に吸い込まれた言葉を、喉のうなりだけでエドワードは表現するしかない。

「ん、んんんっ」

首を竦めるようにして受け入れさせられたキスに、口を予想以上大きく開かれてしまう。そこから自由自在に濡れた舌を絡められると、顎を震わせ、捕らわれたままの身体はびくんと臆病に反応を返した。